平成２８年３月３日

松阪市議会議長
　大平　勇　様

海住恒幸

平成２８年２月２８日に津市島崎町のサン・ワーク津で開催された「第４回あすの三重を考える集い」（みえ自治労連、東海自治体問題研究所などで構成する同集い実行委員会主催）に参加しましたのでご報告します。

●参加日時　平成２８年２月２８日午後１時～４時
●津市島崎町のサン・ワーク津１階会議室
●講師　長友薫輝氏（三重短期大学教授）
著書に『長友先生、国保って何ですか』（自治体研究社）があるなど、社会保障分野では各方面で発言している。

内容
　三重県が県内を８つの区域に分けた医療圏で進めている地域医療構想について県内各区域の医療の現場などで働いている人らからの報告をもとに、現在の地域医療が置かれている状況を知る機会となった。１５人程度の小さな分科会であったが、尾鷲や伊勢、四日市などの公的医療機関で看護師などの職種に就いている人がいて、医師不足の状況などを説明していた。
　コメンテーターの長友先生の発言が参考になった。
　長友先生によると、現在進行中の地域医療構想は、医師・看護師不足を追認するもので、医療従事者は今以上に忙しい体制になる。一方で、過疎地のみならず、中心都市ではない周辺都市では医療の量は縮小再生産されていき、地方にはますます住みづらい状況となる。病床数の削減は、公的医療機関が一番にベッドを差し出すことが求められる。居場所のなくなった若手医師はまた都会に戻っていく。厳しい医療崩壊現象を予想する。
　三重県は秋田県とともに全国トップで準備を進めている。それは、両県に厚生労働省のキャリアが配属されており、結果を出すことが求められている。三重、秋田の動向は全国に波及する。
　会場からの質疑応答となったので、海住は長友先生に質問をした。
　海住　「地域医療」という言葉にはロマンを感じ、「地域医療」とは何かを追求したい気持ちでいるが、松阪市においては救急体制の構築という以外に語ら

れないことが不満だ。本来、「地域医療」とはどうあるべきなのか、お教えいただければと思う。
長友先生　「二次医療圏」という言葉は、医療費をコントロールする概念として１９８５年に登場した。もともとは「地域医療」もそれと同じ。そうではない医療の側面を示す必要がある。たとえば、「救急」ではなく、「健康」という面に重点を置いた政策をつくり、総合診療医の確保やドクターの研修に力を入れるなど、自治体として工夫のしどころはあると思う。「地域づくり」という観点から「地域医療」をとらえ直してみてはどうだろうか。

以上